

ディケンズの初期「短編小説」

村田 信行

20世紀の多くのディケンズ (Charles Dickens, 1812-70) 研究家は、彼の 'short stories' (短い作品や文章のこと) を大体において無視してきた。そして、その未開の作品群に改めて目を向ける研究者も、評価の定まっている長編小説群と比べると、その多くがとまどいを覚えるほど出来が粗いことに気づいていた。「クリスマス・キャロル」(1843)⁽¹⁾ という特別の例外を除いて、そのほとんどは注目されないままであり、ただでさえ人並はずれて量の多い長編群の陰に隠れていた、というのが適当であろう。さらに、ディケンズが『ピクウィック・クラブ遺文録』(1837) で突如売れっ子作家になるまでの間、継続的に書き上げ発表していた作品を自ら編集し直して一冊にまとめた、いわゆる処女作品集『ボズのスケッチ集』(1836) は、その測り尽くせぬ未完の可能性にもかかわらず、1970年代までほとんど日の目を見なかった。⁽²⁾

ディケンズは生涯を通して常に、自作の執筆のほかにはいくつかの大衆的雑誌の編集をして膨大な量の文章を世に送り出している。⁽³⁾ それらはもちろん全てが創作ではないし、ましてやいわゆる「短編小説」と呼べる代物ではない。同じディケンズの研究といっても、長編のそれと、こうした短い作品群の研究とを比べてみれば、確かに別物と考えたほうがよさそうである。それにもかかわらず、後者の作品群(これを stories あるいは short stories と呼ばせてもらう)は、時々大変生き生きと活力があり、技巧上も実験的で魅力にあふれていることが珍しくない。超自然的あるいは心理的異常性というテーマ、大衆向けの娯楽性、そして実用主義に縛られた現実社会における 'fancy' (夢や空想) の重要性の問題などにおいて、ディケンズの一生を貫く大事な考えがすでに根づいていることがわかる。

ディケンズが幼少の頃に『千一夜物語』(*The Arabian Nights' Entertainments*) などの物語集やアディソンとスティールによる『スペクテイタ』(*The Spectator*) などの雑文雑誌を読みふけり、作家としてもその影響を強く受けたことはよく知られているところだが、死ぬまで雑誌の編集に執念を燃やすなど、ある種 stories への強い思い入れがあったことは想像できる。今日「短編小説」といえばポオの理論、すなわち、ひとしきり続けて読み通せるだけの長さにとめられ、あらかじめ計画された効果を十分にもたらすように少しの無駄もなく完璧に構成された文章、ということに落ち着いているが、⁽⁴⁾ ディケンズの言う stories、あるいは sketches にそれは当てはまらない。彼の作品は、時に sketch と言いながら他の多くの stories よりも「短編小説」に近かったりするし、story と言いながら単に事実の報告にすぎなかったりする。この研究では、彼の残した短い文章や作品のうち

初期のものについて、これまでの作家としての評価を踏まえながら、その意義を積極的に跡づけたいと思う。

はじめにディケンズの 'story' の定義を考えたい。H.E.ベイツが『近代短編小説』(1941)で述べたように、確かにディケンズはそのつもりならもっとインクを節約できたに違いない。⁵⁾ 彼の文章の不経済性を多くの評論家は、真の短編小説には向かない題材やテーマを取り扱ったためだとさえ考えた。なるほど彼のごく初期の作品群、つまり『ボズのスケッチ集』や『ピックウィック・クラブ』の中の9つの挿入作品などは、構成は不十分だし洗練さも足りない。もちろんそのために、ディケンズの作品を理解する上でそれらが役に立たないということにはならないが、彼はそのとんでもない文章量とは対照的に、自作の解説は慎んだ作家であるが、次のエピソードは注目に価するだろう。

1852年10月『家庭の言葉』(*Household Words*)の編集長を務めていたディケンズは友人ジェームズ・ホワイト氏に、

私たちは今クリスマス特別号の作品を集めているところですが、もしよろしければ、あなたも話をひとつ書いてくれるのではないですか。

特別号には何か家庭的な名前をつけて、暖炉を囲む家族が語っていると考えられるような短い話だけで構成してはどうかと考えています。(下線筆者)⁶⁾

と書き送っている。この特別号のタイトルは『クリスマスの炉端でひとしきり語られるお話』(*A Round of Stories by the Christmas Fire*)である。この中にはホワイト氏のほかにギヤスケル夫人も名を連ねているが、形式の上で特に統一された様子はなく、正に彼の言葉通りに「クリスマスの夜に家族のなかで語られる話」とでもいうものが唯一の枠のように思われる。

ディケンズにとって、story とは基本的に誰かによって語られた話と考えてよいだろう。この研究の中ではそのまま stories または short stories (story, short story) を使う。また「短編(小説)」とする場合は、近代の定義に則った short story と考えていただければよい。彼の立場で少し詳しく言えば、何人かの登場人物と舞台背景と話の筋があり、誰か語り手がそれに代わる設定があって、その人物が直接物語るという構図になっていることである。彼にとっては、このような話の長さや構成よりも、語られている内容こそが問題であったろう。

ではディケンズが長編ではなく stories でこそ言い表わしたかったこと、あるいは言い表わせたこととは何か。熱心な読者ならすでに気づいているかもしれない。つまり、ここで取り上げている stories と中後期の多くの長編との間にある内容についての直感的な差異を考えればよい。ディケンズの親友であり伝記作者であるジョン・フォスターは、ディケンズの stories をあまり評価していなかったようだが、初期のそうした作品のなかでは、ディケンズは想像力を過度に働かせすぎるとか、自由な想像にふけることがあるとしている。

長編では内在している性質のものが、*stories* では大いに誇張され顕在化するというのである。この性質をディケンズが自ら使ったものの中から 'fancy' という言葉で説明することができる。彼が *stories* のなかで、何かを自由に表現することができると感じていたその原動力が fancy であった。fancy とは空想、夢、幻想などと訳すことが許されるだろう。それは、極言すればディケンズの人生観の軸をなすものであり、『辛い時代』(1854)に描かれていた功利的な実用主義に打ち克つための、あいまいだがきわめて重要なものである。この言葉は彼の文章に繰り返し現われるが、かつてワズワースやコールリッジが使ったように明瞭に定義された批評概念ではなく、むしろ日常の過剰な事実の連続に疲れた人々の心を癒すとびきりの万能薬のように使われている。ディケンズにとって fancy とは *imagination* と同義である。この言葉に彼がこめた意味は、単に日常的世界からつかのまの間逃避することから、創造的な眼を通して日常世界を新しく非日常的なものに変形させてしまうことまで、かなり幅広いものである。fancy は彼の文学理念として基本的なものであり、長編小説の様々な場面にもそれぞれ形を変えて現われる。ディケンズ自身は、そうしたことを集中的に実現できる場であるがゆえ *stories* を大切に思っていたようである。

こうして出来上がった作品群は必ずしも全て理想に叶うものではない。多くは長編に取って代わられるべきものであるが、なかには人間心理の深奥に到達したと思われる、切り込みの鋭く冴えた作品もある。そういう作品を『ボズのスケッチ集』と『ピックウィック・クラブ』の中に求めてみたい。*stories* の執筆に限ってみれば、ディケンズの作家生活は3つの時期に分けられる。⁽⁷⁾

初期 (1833-40) : 雑誌『ハンフリー親方の時計』で本格的に分冊形式の長編に手を染めるまで、精力的に数多くの *stories* を書いた。

中期 (1840年代) : 多分ディケンズ本人が大衆は *short stories* を望んでいないと考えて、クリスマスの作品以外ほとんど書かなかった。⁽⁸⁾

後期 (1850-68) : 自前の2つの雑誌を中心に、再びかなりの数をこなした。

今回の研究はこのうち、初期の一部に該当する。

すでに多くの研究家が述べている通り、ディケンズが少年期(特に彼自身が生涯を通して一番幸せなときを過ごしたと感じていたチャタム⁽⁹⁾での時期)に接した様々な文章や文学は、彼の創作上の想像力に決定的な影響を与えた。人が幼いときに読んだものは必ずその後の辛く厳しい現実社会を生き抜くための糧や道具となると、信じていたディケンズは、幾度となくその効用を文章にもしている。⁽¹⁰⁾ その中心がすなわち、先に論じた fancy であり、*imagination* であり、そしてそれらを *story* として体現したものがいわゆる *fairytale* (童話、寓話、お伽話の類) である。実際、彼がその時期に読みあさったものは、『千一夜物語』や『魔人の物語』(*The Tales of the Genii*, by James Ridley) であり、そして『タトラ

ー』(*The Tatler*)、『スペクテイタ』、『アイドラー』(*The Idler*) といった総合雑誌であった。
 (11) こういった総合誌には、時事的な解説やルポルタージュなどのほか、大衆を惹きつける「物語」、「お話」が必ず用意されていたし、小さくしてその魅力に取りつかれたディケンズは、書き手の側に回った後もその絶大な威力、利き目を信じて疑わなかった。その結果、そこから彼の *short stories* を形作る 2 つの形式も生れてきたと言えるだろう。

ひとつは、詳細で写実的な *sketch* と呼ばれるものである。『ボズのスケッチ集』の真骨頂は正にそれであり、その副題が「ありふれた生活とありふれた人々を生き生きと示した」(*Illustrative of Everyday Life and Everyday People*) とあるように、多くの市井の人々とその何気ない日常生活に題材を求めている。もうひとつは、異常な普通でない物語である。それは大体においてセンセショナルであり、異国情緒風であり、超自然的でさえある。必ずしも心地よくないこと、好ましくないこと、不気味なことも語られる。自らの体験から、彼は後者の作品群が人間にいろいろの異常な心理を引き起こすことも承知していて、そのまま生涯にわたる異常心理への傾倒を示している。

『ボズのスケッチ集』は 4 部構成、全 56 作品から成っている。(12)

第 1 部	我らの教区 (Our Parish)	7
第 2 部	情景描写 (Scenes)	25
第 3 部	人物描写 (Characters)	12
第 4 部	物語 (Tales)	12

タイトルを一見したところ、第 4 部「物語」の名の下に集められた 12 編のなかにも、ディケンズの不気味でお伽話的な題材への傾倒を示すようなものは見当たらない。第 3 部「人物描写」中の 5 編も、形式上は「物語」に含めて考えてよいものだが、いずれも人間の愚行や馬鹿さかげんを笑劇仕立てにしたものばかりである。(13) ただ書かれた順番にしたがって読んでみた場合、ひとつの明らかな傾向がある。この 17 編は執筆時期によって大まかに 8、5、4 編ずつに分別できるが、書かれた時期に大差はないものの、後になればなるほど、その構成上の完成度は高まっていく。最後の 4 編

「グレート・ウィングルベリの決闘」	The Great Winglebury Duel
「ラムズゲイトのタッグズ家」	The Tuggses at Ramsgate
「黒いベール」	The Black Veil
「酔っ払いの死」	The Drunkard's Death

これらのうち前の 2 編は笑劇風、後の 2 編はメロドラマ風で、習作時代とも言える時期ながら、その最終段階らしく、かなりの創作上の力量をうかがわせる。それにとどまらず、この 4 編には『ボズのスケッチ集』のほかの作品にはない、人間の心理的乱れや混乱とい

ったものが、ひとつのテーマとして取り上げられている。前の2編はドタバタ喜劇ながら、人間の心の不安定さやある種の狂気を話の筋の中心にしている。後の2編のうち「黒いベール」は正面から特異な状況下に置かれた人間の狂気を取り上げている。⁽¹⁴⁾ この作品はアン・ラドクリフの『ユードルフォアの惨劇』(*The Mysteries of Udolpho*, 1794) や当時人気を博していた雑誌『ブラックウッズ・マガジン』(*Blackwood's Magazine*, 1817-1980) の影響を受けているとされるが、注目すべき点は、以後何度もこの精神異常の問題が *short stories* に姿を現わすことである。

そのあらすじは次のようである。開業したばかりのある若い医者が嵐の夜初めての患者を迎える。患者は「非常に背の高い婦人で、正式な喪服を着ていて」顔のほうは「厚い黒いベールで包まれていた」(p.372)。⁽¹⁵⁾ 彼女は医者には自分ではなく別のある病人を助けてほしいと懇願するが、「絶体絶命の危機にありながら」その病人には今すぐ面会できないし、ただ翌朝なら可能だが、そのときにはすでに「人の助けの届かないところに行ってしまう」と言う(いずれも p.374)。医者はその婦人と病人が助けを求めて待っているはずの場所へ翌朝行くことを約束する。真相は最後の場面までわからない。医者は荒涼とした地区を抜けて約束の家に着くが、病人は身動きひとつせずベッドに横たわっている。診察を始め、光りを入れようとカーテンを開けたとき、真相が明かされる。病人は、その朝絞首刑にされた死刑囚であり、そして依頼の婦人の息子であった。

この作品は明らかに、息子を思うあまり取り乱した母親が、ひょっとしたら手当てによって奇跡的に命を取り戻すかも知れないというはかない望みを抱いて、ある医者処置を頼むという母親の愛情の物語とも言える。しかし、他のディケンズの作品と比較してみると、「黒いベール」の際立った特徴は、その話の筋ではなく、精神錯乱という問題を強調していることである。終りの場面で婦人は悲しみのあまりに狂気に陥る。そこまでの悲惨な経路はありふれている。「母親は友人も金もない未亡人で、父親のない我が子に与えようと自分に必要なものまで我慢していた。当の少年は、母親の切なる思いを気に留めず、自分のために数々の苦難を忍んでくれたこと　母親は心では絶え間なく気遣い、体も進んで節食してはやせた　も忘れて、放蕩と犯罪の生活に飛び込んでしまう。そしてこんな結果になってしまった」(p.381)。それにもかかわらず、この結末に至るまでの、依頼してきた婦人のみならず、若い医者心理的状态は相当に常軌を逸している。冒頭早々に医者はまだ患者のないままにうたた寝をして「定まらぬ想像」(p.371)をめぐらせているし、婦人が訪れた際の会話も、この想像的(精神的)混乱とも呼ぶべきものに不思議な符合を見せる。

「ずぶぬれですね」と彼は言った。

「ええ」この人物は小さく低い声で言った。

「それにおかげが悪いのでは」と医者は、婦人の声の調子が痛みに苦しむ人のようだったので、思いやってつけ加えた。

「ええ」と答えがあり、「とても悪いんです、体ではなくて精神的に。(後略)」(p.373)

同様に、若い医者は、その奇妙な約束をした夜なかなか寝つかれぬままに、おかしいのは婦人だとしながら自らとりとめもなく乱れた心理状態に陥る。

それから再び、この婦人の知性は混乱を来していたのだという初めの印象に立ち返った。そしてそう考えることが多少なりとも満足の行く問題解答の方法だったので、彼は婦人は狂っていたと信じることにしようと頑なに決心した。しかし、この点について疑心暗鬼はすぐにかれの心に忍び寄り、長くぼんやりした眠れぬ夜の間じゅう繰り返し姿を現わすのだった。その間、彼はそうすまいとする努力にもかかわらず、あの黒いペールを混沌とした頭の中から消し去ることが出来なかった。(p.376)

ドゥブリーズ氏が指摘しているように、翌朝医者が通り抜けて行く荒涼とした地区のかなり細かい描写も、彼の不安定な心理を客観的に投影したと考えてよい。⁽¹⁶⁾ これだけの例を見れば、この作品におけるディケンズの意図が、人間の精神異常にこそあると言えるだろう。そして、これは同じく「物語」12編中の最後を飾る「酔っ払いの死」にもっとあざやかに表現されている。

この作品はもっとメロドラマ仕立てであり、人間の狂気を焦点にしているのが容易にわかる。語り手が言明するように、主人公である父親の零落は型通りのものであり「あまりによくあることなので、どの人間の一生の出来事にも珍しいとも言えない」(p.484)。アル中の父親は心の優しい妻を顧みず、息子たちを家から追い出し、娘を食べ物にし、ついには妻は傷心のうちに死んでしまう。娘も兄弟のひとりが殺人犯となって助けを求め家に帰ってきたとき、父親がわずかばかりの酒のために自らの息子を警察に売ってしまうのを見て、とうとう父親を見捨てる。ここでもやはり、ディケンズの狙いはお定まりの破滅への道を詳述することではない。アル中の父親に見られる、理不尽とも不可解とも言える人間の異常心理である。冒頭部分にアルコールは「ゆっくりだが確実に利く毒を激しく求めることと同じであり、(中略)それは飲むものを狂おしくも墮落と死へ急き立てる」(p.484)と表現され、結末の父親の自殺(川への身投げ)を待つまでもなく、息子を酒のために売ってしまった瞬間に、「彼は飲んでしまった。そして彼の理性は失くなった」(p.490)とあるように、すでに正常ではない。ただ父親の来した異常は、単にアルコールのための悲劇というだけでなく、そのアルコールがもたらした絶対的な孤独、家族からも遊離してしまった人間としての淋しさをも原因とするのである。

以上述べてきたように、『ボズのスケッチ集』のうち最後に書かれた4つの作品は、ディケンズが人間の異常な精神状態を問題として捉えずにいられないことを示している。なるほど後に書かれる数多くの完成度の高い作品と比べると習作の域を出ないが、殊に「黒いペール」や「酔っ払いの死」での問題の捉えかたは非常に鋭くはっきりしている。「酔っ払

いの死」の始めに見られる次の部分は、彼のこの問題への興味を端的に示していて面白い。

死の訪れるのを待ち見守るのは恐ろしいことだ。望みがなくなったとか回復の見込がないと知ること恐ろしい。そして長い夜 病の床を見守るものだけがわかるような夜のやるせない時間をただ座って過ごすことも恐ろしいことだ。心の底の秘密 何年ものあいだ鬱積し隠されたものが、あなたの前に横たわり意識もなくして誰も助けようのない者の口から吐き出されるのを耳にすると、そして熱にうなされているうちに自分の仮面がついにはがされてしまえば、一生保ち続けてきた慎みや抜け目なさがいかに役立たないものかを思うとき、ぞっと寒さを覚える。人はたくさんの奇妙な話を臨終のうわ言のうちに語ってきた。すなわち、悪事や犯罪に満ちていて、立ち会っている人間がそれを見聞きして気が狂ってしまわないとしても、恐怖のうちに逃げ出してしまわずにはいられないような色々な話を。そして多くの者は哀れにも、人知れず、名前を口にするだけで勇敢な人間さえも逃げ出させてしまうような行為の数々をうわ言にわめきながら、この世を去って行った。(p.485)

ここにはディケンズの間人心理への並々ならぬ興味と、ある意味では、それが暴露されることへのかなり生々しい不安がうかがえる。

ディケンズの初期の stories には笑劇仕立てのもの、喜劇仕立てのものが多いが、同時にこの 2 作品のようなものが書かれたことは、1835 年というごく駆け出しの頃 (初めて作品が雑誌に載ったのは 1833 年) 既に、大衆に広く受け入れられていた (と少なくともディケンズは確信していた) 喜劇的な世界を越えて、独自の世界をも構築しようと考えていたことを示している。今回取り上げた 4 編のように、彼は short stories の中に、それまでは通常考えられなかった世界、つまり「ありふれた生活とありふれた人々」とは大きくかけ離れた種類の経験に満ちた世界を作り出そうとしていたのである。それは先に述べたとおり、小さい頃に耽読したいわゆる不思議な物語や不気味な物語に培われてきたものである。『ピックウィック・クラブ』に挿入された 9 つの作品もまた、こうした非常なる世界、異常な心理に埋もれた世界を探ろうとディケンズが手を伸ばした成果である。この 9 編の分析については次回に譲りたい。

注

(1) この論文中に言及するディケンズの作品について、その英語のタイトルと発表年をここに列挙しておく。以下言及の順。

「クリスマス・キャロル」'A Christmas Carol' (1843)

『ピックウィック・クラブ遺文録』*The Posthumous Papers of the Pickwick Club*

(1837)

『ボズのスケッチ集』 *The Sketches by Boz* (1836)

『辛い時代』 *Hard Times* (1854)

(2) 最初の本格的な研究は、Virgil Grillo, *Charles Dickens' Sketches by Boz: End in the Beginning* (Boulder, Colorado: Colorado Associated Univ. Press, 1974) である。引き続き、Duanne DeVries, *Dickens's Apprentice Years* (New York: Harvester Press, 1976) に詳しく、さらに Deborah A. Thomas, *Dickens and the Short Story* (Philadelphia: Univ. of Pennsylvania Press, 1982) では、ディケンズの short stories という観点から新たな研究がされている。

(3) 携わった 3 つの雑誌を年代順に挙げておく。

『ハンフリー親方の時計』 *Master Humphrey's Clock*, 1840-41

『家庭の言葉』 *Household Words*, 1850-59

『一年中』 *All the Year Round*, 1859-70

(4) 「構成の原理」 "The Philosophy of Composition", 1846.

(5) Herbert E. Bates, *The Modern Short Story*. 中西秀男訳 (開文社、1958 年)、「1.回顧」の章。

(6) Thomas, op. cit., p.3.

(7) Thomas, op. cit., p.6.

(8) 1843 年から 48 年にかけて毎年 (1847 年は除く) クリスマスに発表された 5 作品は、1852 年一冊にまとめられ『クリスマスの本』 (*Christmas Books*) となっている。

(9) Chatham ロンドンの東 50 キロほどのテムズ川沿いにある田舎町。

(10) 幼少の読書体験全般については、前掲 DeVries の研究に詳しい (pp.4-8, 24-26)。

(11) 前者 2 つは前述の通り、18 世紀初期アディソンとスティールのコンビによるもの。後者は 18 世紀半ばジョンソン博士による。

(12) その構成と現在の形にまとまるまでの改訂の様子は、筆者の論文「『ボズのスケッチ集』の由来と改訂過程」(清泉女学院短期大学研究紀要 4 号、1986 年、英文)にまとめてある。

(13) DeVries, op. cit., p.93.

(14) 拙訳 (清泉女学院短期大学研究紀要 7 号、1989 年) 参考。

(15) 「黒いベール」「酔っ払いの死」の訳は拙訳による。引用の後のページ表記は、The Illustrated Dickens 版 (London: Oxford Univ. Press, 1957) による。

(16) DeVries, op. cit., p.125.

出典：『清泉女学院短期大学研究紀要』第 8・9 号 (1990 年 10 月)